

大学生の余暇と生活満足度の関連性に関する研究

スポーツマーケティングゼミナール 1315021 小山凜

1. 研究動機・研究目的

現在、働き方改革が進み、余暇時間の増加による余暇への関心が高まっている。政府はさらなる改革を目指し、2020年に年次有給休暇取得率を70%（2015年時点48.7%）、週の労働時間が60時間以上の雇用者割合を5%（2016年時点7.8%）など、2020年へ向けた具体的な数値目標を掲げている（厚生労働省、2015）。さらに、仕事と生活との調和（ワーク・ライフ・バランス）が実現すれば、人々の余暇時間が増加し、消費活動の配分が変化する可能性がある。今後、働き方・休み方改革の進展に伴い、人々の趣味やレジャーの時間が増えるなど、ライフスタイルの変化が起こりうるだろう。労働者だけでなく、大学生のアルバイト就労も注目されている。授業やアルバイト、部活動などの中で、比較的時間のある大学生の余暇活動に期待が高まるのではないか。また、近年では「物の豊かさ」よりも「心の豊かさ」を重視する傾向にあり、人々の精神的な充実感や安心感が生活満足度を高める効果を持つことが報告されている。働き方改革が進み余暇時間の増加が見込める中、今後の消費ターゲットとなる若者の余暇活動と生活充実感から、それに関与している金銭面の様相をについて着目した。

大学生における、余暇志向性と生活充実感の関係を金銭的側面から明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

2018年11月21日～26日にて、A大学のスポーツ系学部に通う1年生～4年生の学生の男子69名、女子92名、計161名直接配布・回収による質問紙調査を行った。調査内容は個人的属性（4項目）、金銭的内容（7項目）、生活充実感尺度（20項目）、余暇志向性尺度（32項目）を網羅した。全ての統計分析はIBM SPSS Statisticsを用いて分析を行い、単純集計および分散分析を実施した。

3. 主な結果と考察

性別についてみると、男性が42.9%（n=69）、女性57.1%（n=92）、で女性の割合がやや高く、年齢は21歳（34.2%）が最も多く、次いで20歳（24.8%）、19歳（16.8%）であった。部活動やサークルの所属に関しては、所属しているものが85.7%（n=138）とほとんどを占めていた。居住形態は、一人暮らしが最も多く55.3%（n=89）、実家暮らし19.9%（n=32）、寮23.0%（n=37）、その他1.9%であった。

金銭的余裕に関しては、「ある」「ややある」の「ある群」が37.9%（n=61）、「どちらともいえない群」が18.6%（n=30）、「あまりない」「ない」の「ない群」が37.9%

（n=61）であった。金銭的余裕が「ある群」と回答したサンプルの方が、「ない群」と回答したサンプルよりも「1ヶ月で自由に使えるお金」や「1ヶ月に趣味に使うお金」が高

いが、「1ヶ月のアルバイト代」の額は低かった。「親からの仕送り・お小遣い」は多くもらっている傾向にある。「金銭的余裕」は「生活充実感」と「余暇志向性」に関連がないことが明らかになった。金銭の現状と金銭的余裕は密接に関係しており、金銭的余裕が「ある群」は「1ヶ月で自由に使えるお金」「1ヶ月に趣味に使うお金」が「ない群」よりも高かった。「親からの仕送り・お小遣い」をもらっている額も高かった。「1ヶ月のアルバイト代」は金銭的余裕が「ない群」よりも稼ぎがないようだった。

A大学のスポーツ系学部を対象に調査を行ったが、A大学は部活動やサークルに所属している人が比較的多いことや、大学が郊外にあることから、交通費やアパートなどの賃貸料など、大学独自の特徴が影響を与えていると考えられる。

4. 結論

金銭的余裕に関しては、「ある」「ややある」と回答したものをまとめた「ある群」が37.9% (n= 61)、「どちらともいえない群」が18.6% (n=30)、「あまりない」「ない」と回答したものをまとめた「ない群」が37.9% (n=61)であった。金銭的余裕が「ある群」は、「ない群」よりも「1ヶ月で自由に使えるお金」や「1ヶ月に趣味に使うお金」の額は金額の高いカテゴリーの割合が多いが、「1ヶ月のアルバイト代」の額は金額の低いカテゴリーの割合が多かった。「親からの仕送り・お小遣い」は高い金額のカテゴリーの割合が高いため、多くもらっている傾向にあると考えられる。つまり、親からの金銭的支援によって、金銭的余裕が生じていると考えられる。

「金銭的余裕」と「生活充実感」および「余暇志向性」関係について、金銭的余裕が「ある群」「どちらともいえない群」「ない群」の3グループ間において、平均値を比較するために分散分析を行った。その結果、生活充実感と余暇志向性ともに、統計的に有意な差はみられなかった。

5. 卒業論文の執筆を終えて

本研究の過程において、終始懇切なるご指導と御鞭撻を賜り、本論文をまとめるに際して、親身な御助言と力強い励ましを頂いた、スポーツマーケティングゼミナールの工藤康宏先生に、心より感謝を申し上げます。また、質問紙調査に御協力頂いた、学部生の皆様に厚く御礼申し上げます。最後に、楽しい時も辛い時も一緒に過ごしたゼミ員がいたからこそ頑張ることができました。貴重な仲間に出会えたことに感謝しながら筆を収めたいと思います。

主な引用参考文献

- ・公益財団法人日本生産性本部 (2018) : レジャー白書 2018
- ・大野久 (1984) : 現代青年の充実感に関する一研究 —現代日本青年の心情モデルについての検討— 教育心理学研究 32 巻, 2 号, 100-109
- ・佐橋由美 (2010) : レジャー志向性尺度の開発 ; 成人女性サンプルによる尺度の有効性の検討と旅行行動への応用 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要 9 巻, 35-54